

書評/新刊紹介

土持ゲーリー法一編著
『津軽学—歴史と文化』

蝦名敦子*

本書は、弘前大学における21世紀教育（教養教育）で開講されている講義および実習・実演を中心とした、ユニークな授業の全容が初公開されたものである。

「津軽学」のタイトルが示すように、授業は津軽という地域に焦点を当て、地域を代表する芸術家などを交えた多彩な講師陣による。しかも実演・実習を数多く盛り込んだ、学生参加型の授業である。

「津軽学」というタイトルもさることながら、この本書の一番の特徴は、学習者の立場から一貫してまとめられている点にあらう。各章がそれぞれの授業内容から構成されており、タイトルの次に講義概要、次に編者による「授業から学んだこと」、最後に「学生からのフィードバック」として、授業を受けた学生の感想（ラーニング・ポートフォリオ）が記される、というスタイルを採っている。編者が各回の授業を学生と一緒に学び、授業中に録音したテープをもとに「授業から学んだこと」として、編者の視点から授業の内容が記述されているのである。大変おもしろい授業であることが、編者によるその臨場感のある解説で伝わってくる。さらに学生のラーニング・ポートフォリオ（学習実践記録）が掲載されているが、それにより授業の紹介に留まらず、それを学生がどのように受け止めたのかが、わかるようになっている。いかに学生にとっても反響が大きかったかが想像できる。

学生の生の声が記載されていることにより、単なる授業公開ではなく、受講者がどのように理解したのか、授業としての質を読者にそのまま公開していることになる。この点は、編者が専門としている授業改善、学習改善のための教育学が本書に反映されているのである。

授業の成り立ちについては、そもそもこの授業は学生にとって地域に対する歴史や、文化の理解を深めることを目的としたものであるという。弘前大学の新カリキュラムの中でも注目を集めた授業である。中身の特色としては、高校と大学、社会との連携を図るべく、地元の高校教員および地域の文化・工芸伝承者が、非常勤として教壇に立っている点が挙げられる。また講義のみならず、実習・実演を中心とした内容であることが、学生からも体験的に学ぶことができ、そのユニークさに共感、感動したという感想が多く述べられている。

本書の内容は、次のような構成になっている。

1. 弘前ねぶた絵の歴史—実演 八嶋龍仙（津軽伝統ねぶた絵師）
2. 津軽三味線の歴史と実演—大條和雄（津軽三味線歴史文化研究所）
3. 津軽塗の文化と歴史—実習 佐藤武司（弘前大学名誉教授）
4. 石坂洋次郎『青い山脈』—館田勝弘（元弘前中央高等学校校長）
5. 旧制弘前高等学校の太宰治—相馬明文（浪岡高等学校教諭）
6. 津軽放言詩—山田 尚（詩誌「亜土」主宰）
7. 寺山修司の世界—櫻庭和浩（青森北高等学校教諭）
8. 現在活躍中の文学者—齋藤三千政（元黒石高等学校校長、弘前ペンクラブ会長）

*弘前大学教育学部、美術教育
Faculty of Education, Hirosaki University

9. 弘前藩の歴史と文化—長谷川成一（弘前大学人文学部教授）
 10. 近代津軽の西洋文化受容(1) 明治初期の外国人教師たち—北原かな子（秋田看護福祉大学教授）
 11. 近代津軽の西洋文化受容(2) 津軽地方初の米国留学生たち—北原かな子（秋田看護福祉大学教授）
 12. 旧制弘前高校の歴史—前島郁雄（東京都立大学名誉教授）
- 以上に加えて、津軽弁の朗読CDが付録となっている。

ざっとこれらの項目を見ただけでも、まさに津軽の歴史と文化について特筆すべき内容が網羅されており、各テーマに最も詳しい教授陣を配しながら、どれだけユニークな授業内容であるかが窺い知れよう。

大学生が受講する前の準備段階として、この著作を手にとれば、実際の授業がより実り多いものとなるであろうし、また読むことによって是非、授業を受けてみたいと興味をそそられるに違いない。

「津軽学」として、今後どのような内容の広がりを見せるのであろうか。限られた時間内では、とても講義内容をさらに増やす余地はないであろうが、これだけ多様な内容を受講すれば、読者としてもっと知りたいという欲が出るのは、私だけではないであろう。一つの授業科目でこれだけ「津軽」について、多様な観点から興味をそそられる内容を揃えている授業は、滅多にない。

編者は「将来的には、『津軽学—歴史と文化』（歴史版）だけに留まらず、『津軽学—現代と社会』（現代版）のような新しいカリキュラム開発ができればと考えている」という。「津軽学」が今後、充実・発展するための学的な方向性が、どのように打ち出されていくのかを期待していきたい。



〔東信堂 本体2,000円〕